JIFSAN 夏期総合プログラム
リスクコミュニケーション概論コースに参加して

平成17年8月31日（水）

食品安全委員会事務局
勧告広報課
技術参与　原　恵

1

JIFSANとは？

JOINT INSTITUTE FOR FOOD SAFETY AND APPLIED NUTRITION

- JIFSAN ＝ **食品安全･応用栄養学統合研究所**
- **食品に関するリスク分析および応用栄養学についての研究･教育機関**
- 1996**年、**Maryland**大学と**FDA**(米国食品医薬品庁）に付属する**CFSAN**(食品安全応用栄養センター）および**CVM**（獣医学センター）の相互協力により設立**

2

JIFSAN夏期総合プログラム
食品安全リスクコミュニケーション概論

- **受講コース：食品安全リスクコミュニケーション概論**
  Introduction to Food Safety Risk Communication
  (JIFSAN Food safety risk analysis professional development training program 2005 **9コース中の1つ**)
- **主催：**JIFSAN
- **日時：2005年8月2日（火）～4日（木）**
- **場所：米国メリーランド大学（メリーランド州）**
- **参加人数：20名（4カ国）**

夏期総合プログラムの内容

修了証を取得するには必ずRCのコースを受講する必要がある →
リスク分析に関わる全ての人がRCの概念を必要とする

- **食品安全に興味を持つ全ての関係者が海外からも参加可能**
- **4つ以上のコースを修了することにより、3種類の修了証を取得**
- **「リスク分析総論」および「リスクコミュニケーション概論」は必修**

Overview of Risk Analysis	1日
Introduction to Food Safety Risk Management	3日
Introduction to Food Safety Risk Assessment	3日
Introduction to Food Safety Risk Communication	**3日**
Introduction to Economics for Risk Analysis	2日
Quantitative Risk Assessment Methods: Probabilistic Methods	2日半
Quantitative Risk Assessment Methods: Model Building	2日半
Introduction to Food Safety Epidemiology	2日半
Overview of Food Toxicology	2日半

プログラムの目的

リスク分析システムに関して、

- FDAとWHO/FAO,CODEX**等の国際機関や諸外国との協調**
- **国際的なイニシアティブ**
  - JIFSAN**および**FDA/CFSAN**は食品に関するリスク分析を積極的に研究・教育**
  - **海外に対しても情報提供や研修等を実施**

食品安全リスク分析関する研修は、米国では他にハーバード大学のみ

5

リスクコミュニケーション概論コースの受講者

- **20名の参加者（4カ国、5機関、1企業）**
  - **米国食品医薬品庁**（FDA/CFSAN）：11**名**
  - **米国環境保護庁**(EPA)：1**名**（KFDA**からの研修者**）
  - **Chick-Fil-A Inc.(米国外食産業）：1名**
  - **マレーシア保健省**：3**名**
  - **韓国食品医薬品庁**(KFDA)：2**名**
  - **食品安全委員会事務局**：2**名**
- **参加者は、科学者及び評価や管理の行政官が主**
- **ほとんどの参加者はこの他のコースにも参加**

6

受講者の業務やＲＣに関する活動状況

- ***ほとんどの参加者は評価･研究を業務としており、RCに現在、直接関係することはないとのことであったが･･･***
  - FDA/CFSAN：ほとんどの受講者が科学者もしくは行政官。リスク分析チームの一員としてRCトレーニングも必要。受講希望者は無料でコースを受講できる。
  - KFDA：科学者。最近、所属部署でもRCに取り組むようになり、意見交換会等を行っている。試行錯誤の段階。
  - マレーシア：行政官。食品安全については、リスク分析の枠組み以前の課題が多い。

受講の動機

- FDA/CFSAN：科学者や行政官として、わかりやすい情報提供（資料作り等）が必須の課題。また、消費者等一般の人との認識の差を縮めたい。今後、MessengerやSpokesperson等としてメディア対応等を行えるように受講。
- KFDA：特にメディア対応が課題。今後、積極的に、意見交換会等のＲＣも推進していく。スポークスパーソンになれるようコースを受講。
- マレーシア：リスク分析の一貫としてのRC。
- 日本：米国のRC研修状況の調査。

スポークスパーソン／メッセンジャー

- スポークスパーソン／メッセンジャーの素質
  - 参加者と打ち解けて話せる人
  - リスクコミュニケーションについて理解している人
  - トピックについて知見がある人
  - 参加者と信頼関係を築ける可能性のある人
  - トピックの専門家（科学者）もしくはＲＣの担当者、どちらがスポークスパーソンを勤めるにしろ、ＲＣのトレーニングを受けていることが第一条件

- コースの中では“リスクコミュニケーター／ファシリテーター“という言葉は使われていなかった。
- “スポークスパーソン”“メッセンジャー”という言葉が使われていた。報道官的意味合い（？）
- 「相互理解」をＲＣの目的とすると言いながら、“情報を伝える”“インプット”という言葉を強調（？）
- 政府機関が、議論の調整をすることを想定していない（？）

9

意見交換会の問題点

- 積極的な参加者にも時間的制約を強いる
- コメンテーターも公共的な立場からしか話せない
- 反対グループの活動を助長しがち（例：私たちＶＳ彼らなどの表現から）
- 様々な表現や代表的でない見識を取り上げにくい
- 個人個人に適した対応が取りにくい

10

オープンハウスとは？

- オープンハウスとは、意見交換会の代わりに行ったり、意見交換会と同時に行う情報提供の1つの形。通常ポスターセッションなど。
- 4～6つ程度の展示

Advantage of an open house

1. 1対1のコミュニケーションの促進
2. 個人個人にあった情報の提供
3. コミュニティー（関係者団体）の参加に効果的

- 意見交換会では質問の時間等も限られることから、会場外等で取り入れられないか？
- 実際、ＦＳＣにオープンハウスデイを設けられないか？

コースを受講しての感想 (1)

- 米国においてもＲＣは未だ大きな課題
  - 一般的に食品安全について真剣に考えている人は限られている
    - リスクの本質の知識がないまま、漠然とした不安感
    - 身近なメディア等の情報に左右されがち
  - 一方で、強いポリシーを持った人々（消費者団体、環境関係団体等）とどのように双方向のコミュニケーションを進めていくか？
- ＲＣは2つのアプローチ（情報提供および意見交換／聴取）に分ける必要がある
  - さらにターゲット毎・理解度毎に細分化して対応することが必要

ＲＣを本気で行っていくならば、相当な労働力が必要！！

コースを受講しての感想 (2)

- 評価機関におけるＲＣとは？
  - 米国では、評価と管理は機関内での機能分離。
  - ＲＣは評価･管理のどの段階でのものか不明確（？）。
  - 米国では、意見交換･聴取の1つの場である意見交換会も1つのトピックに対し、全米3カ所程度でしか行っていない。

↓

リスク分析の早い段階からＲＣは始められているが･･･

- 専門的･科学的評価について、正確性を保ちながら、誰にでもわかりやすい情報が提供されているか（？）
- 実際には管理的な事項に関するＲＣが中心（？）

ご静聴ありがとうございました！